

保育の質的向上に関する研究（Ⅱ）

—第三者評価に見られる現場サイドの質的向上の視点を手がかりとして— (受審園別にみる考察)

高 濱 正 文

A research about improvement of quality of Childcare
-A viewpoint of qualitative improvement of childcare staff by evaluation-
Consideration every childcare which took evaluation

Masafumi TAKAHAMA

はじめに

2000年に試行された社会福祉法において、保育所保育にサービスの質の向上と評価が要請されるようになった。それを受けて、2002年度より全国保育士養成協議会による第三者評価事業が実施された。保育の質の向上を目的として導入された第三者評価ではあるが、実際に第三者評価が保育の質的向上にどのような形で寄与しているのか、その有用性ははっきりと捉えられていない。

そこで本研究では、実際に第三者評価を受審した園の保育士及び施設長を対象に、質問紙と聞き取りによる調査を行った。第三者評価を契機として、保育士や施設長が保育の質をどのように捉え、保育に対する意識や実践がどのように変容し、質的向上に向けた取り組みとなっているのかを究明する。その上で、保育の質を向上させていく重要な要因を探ると共に、第三者評価が果たすべき真の役割を併せて論考していく。

なお、本報告は今治明德短期大学研究紀要第30集（2006）にて報告した第三者評価受審を契

機として、保育士、施設長の意識や保育内容がどのように変化したのかを領域別に分析した研究の継続報告である。

1. 2002年度第三者評価受審園を対象とした質問紙による調査目的と方法

(1) 調査目的

保育の質的向上の糸口を探る際に必要なことは、まず保育の実情を捉えることであると考えられる。保育現場の実情を把握することは、保育の質がどのような視点で捉えられ、評価され、こういった部分が課題や問題点として問われるのかを掴む契機となる。保育体制、保育方法・形態、保育目標・内容、保育のあり方等の保育実践は、諏訪が「『保育の質』は『保育士の質』に尽きるといわれるほどに、保育士のあり方に負うところが大きい」¹と述べているように、保育士の意識により大きく左右する。また保育士と同様に、施設長の意識も園運営を左右する重大な影響を及ぼす。

そこで、保育の質の基軸となる保育士、施設長が第三者評価を受審したことによって、何が変わり、どこが変わり得なかったのかを意識調

査から解明していく。また、その変化は保育士個人個人の意識レベルのことなのか、各園で差異が見られるものなのかも併せて論考する。仮に園によって違いがあるとするならば、それはどういったものから起因するのかを様々な視点により分析していくことを目的とする。

今回は受審園比較を中心に報告を行うものとする。

(2) 調査方法

調査対象：2002（平成14）年度第三者評価受審園54園のうち無作為に抽出した12園、計190名の保育士及び施設長（回収率：55%、有効回答数：105名）

調査期間：2004（平成16）年6月～7月

調査方法：質問紙法。質問紙は郵送により配付。回答はより個人的見解を示し易いよう個別に返送してもらう方法を採用した。

調査内容：調査内容は、5段階評定による回答と自由記述に二分した。

質問項目は、諏訪らが作成した「保育評価表」30項目と、岩立らが保育の質を測定するために分析、抽出した84項目を参照し、6領域67項目を設定した。具体的には領域1. 保育者間の関係：11項目、領域2. 保育士（あなた）の保育姿勢：17項目、領域3. 保育のあり方：10項目、領域4. 子どもの姿：8項目、領域5. 親との関係：12項目、領域6. 保育環境・条件：9項目である。なお、各設問に対して「非常にそう思う」「そう思う」「わからない・どちらともいえない」「そうは思わない」「まったくそう思わない」の5段階評定の回答を設けた。

次に、自由記述においては、第三者評価を通して、園や保育士がどのように変化したのか、また保育の質を向上させていく上で重要と思われる要因について尋ねた。質問内容は以下の通りである。

設問①「園全体、もしくは自分自身が第三者評価の前後で最も大きく変化があったと思われることをお書き下さい。また、その理由等もお書き下さい。」

設問②「保育の質的向上に重要な要因はどういったことがあると思いますか、お書き下さい。」

以上の5段階評定の結果と自由記述を基に分析を試みる。

なお、先行研究にならって〈領域5. 親との関係〉としているが、本文中は「親」を「保護者」という表現を用いる。

2. 領域別園比較の分析結果と考察

質問紙の質問項目別に、受審後に5段階評定の数値が上がったものを〈向上・改善〉した、数値が下がったものを〈課題・問題点〉となつたとし、表1に示した。（分析結果の詳細は今治明德短期大学研究紀要第30集〔2006〕参照）6領域の各項目を見ると、保育士の意識が、第三者評価受審を機に変化したことは明らかとなった。しかし、質問紙結果を個別に見ると同一園においても、保育士によって向上・改善したと評価する項目数に大きな差があり、項目によっては、園による大きな違いが見られる。そこで、園ごとにどのような相違点があるのか、園単位で5段階評定の結果を基に分析を行っていく。

そこで、6つの領域ごとに今回の対象園12園を比較し、各園の向上・改善と課題・問題点の詳細を分析する。注意すべき点として、各園で回答した保育士の数が違う為、単純に比較はできないが、回答者数を考慮した上で、考察を試みる。

(1) 保育者間の関係における園別比較

〈領域1. 保育者間の関係〉の各項目について園ごとの評価を示したのが、表2である。上段に示した数は向上・改善したと評価した保育士数、下段の数値は課題・問題点となつたと評価した保育士の数である。

誰も評価したものがいない項目については計の部分を除き、棒線を記した。まず、下段の課題・問題点と評価した延べ項目数（計の部分）を見るとC, D, G, I, J保育園はゼロに対して、A保育園は26項目にも上る。この領域の

表1 各質問項目における第三者評価受審後の変化

保育士数

質問項目	向上・改善	課題・問題点
(1) 保育者間の関係		
①園全体に一体感がある	36	5
②職員全体の人間関係がよい	9	5
③職員間の意志疎通がうまくいっている	36	7
④お互いに意見の違いを認め合える	25	8
⑤同僚と保育について話し合える	20	4
⑥園長や主任などの上司と保育について話し合える	27	5
⑦保育のなかの役割分担がうまくいっている	30	5
⑧状況に応じて保育者同士、声を掛け合い、援助している	27	2
⑨子どもの気持ちや状態を保育者間で取り次ぎ合っている	25	3
⑩状況を見て役割交代をスムーズに行っている	27	3
⑪園内研修や職員会議等で子どもの発達などについて具体的に話し合う機会がある	37	4
(2) 保育者(あなた)の保育姿勢		
①保育者が子どもの主体性、自主性を尊重しようとしている	33	1
②保育者が子ども一人ひとりの気持ちに寄り添おうとしている	35	3
③保育者が子どものありのままを温かく受容しようとしている	31	1
④保育者が子どもとゆったり関わろうとしている	32	6
⑤保育者が子どもに笑顔で接しようとしている	19	2
⑥保育者が子どもと共感することを大切にしている	22	1
⑦保育者は子どもがのびのび活動出来るよう配慮している	24	1
⑧保育者が子どもと一体になれるように心がけている	23	2
⑨保育者が子どもの意欲を引き出すようにしている	28	1
⑩保育者が不用意に子どもをせかしたり、制止するような言葉かけをせず、子どもの行為を見守るように心がけている	39	4
⑪保育者が子どもの自我(思い・言い分)を大切にしている	28	2
⑫保育者は子どもに必要な援助を行うよう心がけている	23	0
⑬保育者が子どもの心の拠り所となれるよう努めている	23	1
⑭保育者が子どもどうしの関係を大切にしている	20	1
⑮保育者は落ち着きあるふるまいを行うよう心がけている	28	2
⑯保育者が一人ひとりの子どもの興味や課題を把握している	24	3
⑰保育者が温かな言葉づかいで、おだやかに言葉かけをしている	32	2
(3) 保育のあり方		
①形や時間にとらわれない自由な保育をしている	21	10
②子どもの遊びを重視して保育している	20	4
③保育者はうまく活動に入れない子どもに対して遊びのきっかけをつくっている	23	1
④保育者が必要以上に遊びに介入しないようにしている	27	2
⑤子どもがそれぞれに活動できる保育をしている	28	5
⑥子どもの活動が継続的に行えるような配慮をしている	24	1
⑦子どものしつけやけじめを考慮して保育している	17	3
⑧季節や興味に応じた室内外の活動を大切にしている	18	1
⑨クラスとしてのまとまりよりも、一人ひとりの興味や関心を大切にしている	21	4
⑩自分の保育を振り返り、反省したり、改善しようとしている	35	0
(4) 子どもの姿		
①表情の明るい子どもが多い	13	1
②親と別れる時に後追いする子どもはあまりいない	11	11
③それぞれの子どもが、お気に入りのおもちゃや場所をもっている	20	1
④それぞれの子どもにはクラスの中に好きな保育者がいる	8	4
⑤好きな遊びや気に入ったものに集中して取り組む子どもが多い	25	2
⑥他の子がすることをじっと見つめたり、真似したりする子どもが多い	15	4
⑦毎日保育園へ来るのを嫌がらず、元気に登園する子どもが多い	14	1
⑧好きな保育者に甘えたり、要求を素直に伝える子どもが多い	14	1

(5) 親との関係		
①連絡帳で親と子育ての情報を相互に伝え合っている	21	4
②連絡帳の書き方を工夫して親が共感できるようにしている	21	2
③親と連携して子育てできるように、クラス便りや園便りで子どもの姿を詳しく伝えている。	26	0
④子ども・親・保育者が個性を発揮して、お互いに認め合えるようにしている	12	1
⑤保育者と親がお互いに信頼感で結ばれている	19	2
⑥保育者と親と一緒に子どもを育てているという一体感がある	18	1
⑦親が保育内容等に意見など言える体制ができている	32	4
⑧親たちが他の子にも関心をもち、子ども達が大勢の大人たちに見守られて育っている	16	7
⑨親から個人的に相談をもちかけられることがある	12	5
⑩苦情など親に対する説明が十分にできている	35	4
⑪親自身が保育の中に入る保育参加を行っている	20	4
⑫クラスの親との懇談会を定期的にもって、学習したり話し合っている	17	8
(6) 保育環境・条件		
①保育室やテラスなど保育環境が清潔に整えられている	32	3
②遊具が整備され、いつでも子どもが自ら取り出せるように配慮している	33	5
③様々なコーナーを設けて、子どもが自発的に活動できるようにしている	27	5
④保育の環境が工夫され、それぞれの遊びが充実し、他の遊びの妨げにならない工夫や移行しやすいようになっている	25	5
⑤保育者の手作り遊具等を取り入れたり、興味や発達に応じた遊具を整えている	21	6
⑥静かな遊びを楽しんだり、リラックスできる空間が整えられている	21	3
⑦自然光など室内の明るさや空調に配慮している	28	3
⑧施設や遊具等に破損箇所がないか点検している	30	2
⑨施設や遊具等の使用に関して安全に配慮している	28	0

課題・問題点の総合計が53項目であることから、およそ49%をA保育園が占めていることになる。つまり、項目別分析で保育士間の関係が、課題・問題点として多く挙がっていたが、その大部分はA保育園が占めていることになり、全体的には〈領域1. 保育士間の関係〉は、さほど課題・問題点として評価されていないことになる。しかし、A保育園を事例として、26項目もの課題・問題点があると評価している現状を見過ごすことはできない。その延べ26項目のうち、一人の保育士が〈領域1. 保育士間の関係〉全11項目中、8項目が受審前後で2.「そうは思わない」だったり、受審後に課題となったと評価している。数の問題ではないが、保育士間の関係において、部分的、もしくは個人的に課題・問題点となるものがある以上、質的向上に向けた取り組みへの弊害ともなる。保育士一人ひとりを見た場合、「それぞれの職種には

固有の責任と役割があり、保育所はそれらの職種が協力し合って成り立っている」²しかし、「日常の忙しさのなかではなかなかお互いの仕事がみえず、理解しきれない場合も出てきます。ときにはそれが職種間の対立となることもあります」³と岡田は指摘している。であるならば、保育士が切磋琢磨して互いを認め、高め合っていける関係の構築に必要な手だてを見出さなければならない。その手だての一つとして主任保育士の存在がある。主任の役割として「それぞれの職務の状況をつかみながらつなげていく必要がある」、「それぞれ独自の職務の責任を十分果たせるように、それぞれの分野で力が発揮できるようにしながら、同時に各職種間を結ぶための体制づくり」⁴が求められているのである。A保育園に関して言えば、向上・改善したと評価する保育士も多く、11項目すべてにおいて、3～7人が向上・改善したと評価

表2 〈領域1. 保育士間の関係〉における園別比較

領域1. 保育者間の関係

(人)

園名(人数)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	計
A保育園 (20)	6 5	3 2	7 2	6 4	3 2	4 4	4 3	4 1	7 1	7 1	5 2	56 27
B保育園 (18)	8 1	2 -	9 -	5 -	8 -	5 1	9 -	6 -	5 1	6 1	8 -	71 4
C保育園 (10)	1 -	1 -	2 -	1 -	1 -	2 -	1 -	2 -	1 -	1 -	- -	13 0
D保育園 (10)	3 -	- -	4 -	1 -	- -	- -	2 -	3 -	5 -	3 -	6 -	27 0
E保育園 (7)	4 -	- 1	1 1	3 1	2 -	2 1	4 1	1 -	- -	2 -	- 1	19 6
F保育園 (7)	1 1	- 1	- -	1 1	- 1	3 -	2 1	1 1	2 -	- 1	4 -	14 7
G保育園 (6)	3 -	- -	4 -	4 -	3 -	5 -	3 -	2 -	2 -	2 -	5 -	33 0
H保育園 (6)	1 -	- -	2 -	- 1	1 -	2 -	1 -	1 -	1 -	2 -	2 -	13 1
I保育園 (6)	3 -	1 -	4 -	1 -	1 -	2 -	3 -	5 -	- -	- -	3 -	23 0
J保育園 (6)	1 -	- -	1 -	2 -	- -	- -	- -	- -	1 -	1 -	1 -	7 0
K保育園 (5)	3 -	2 -	2 -	1 -	1 1	2 -	1 -	1 -	1 1	3 -	2 1	19 3
L保育園 (4)	2 -	- 1	- 4	- 1	- -	- -	- -	1 -	- -	- -	1 -	4 6

上段：向上・改善 下段：課題・問題点

している。ということは、A保育園においては、〈領域1. 保育士間の関係〉について、向上・改善したと捉えている保育士もいるが、逆に課題・問題点として、保育士の関係性を指摘する意見もある。

もう一点注目すべきは、L保育園であり、延べ項目数を見ると向上・改善した数より、課題・問題点となった数の方が多い。しかも、③「職員間の意志疎通がうまくいっている」の項目では、4名全員が課題・問題点と捉えている。この詳細は、全員が受審前後で2.「そうは思わない」と評価している。対象人数がわずか4名と少ない為、一概に、この園が「意志疎通」に関してうまくいっていないと判断するのは、妥当とは思えないが、少なくとも今回の調査対象者は一様に同じ評価をしている。受審前後とも変わらず、意志の疎通がうまくいっていないと評価していることから、同園に関しては、

第三者評価が保育士間の関係に影響を与え得なかったと判断できる。

しかし、同項目について、B保育園を見ると半数の9名が向上・改善したと評価している。やはり、園によって第三者評価が保育士間の関係に与える影響は違うものと判断できる。

(2) 保育士の保育姿勢における園別比較

次に保育姿勢について各園の傾向(表3)を見ると、対象園の半数、6園が課題・問題点と捉えた項目がないことがわかる。しかし、〈領域1. 保育士間の関係〉同様、A保育園では述べ16項目が課題・問題点として評価されている。しかし、向上・改善したと評価する保育士も多く、94項目にも及ぶ。B保育園について言えば、延べ113項目で向上・改善したと評価されている。これを一人当たりの項目数にすると6.2項目が向上・改善したと評価していることになる。一人当たりの項目数がさらに多いの

表3 (領域2. 保育士の保育姿勢) における園別比較

領域2. 保育者の保育姿勢

(人)

園名(人数)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	計
A保育園(20)	6 1	6 2	6 -	10 1	5 2	5 1	5 1	6 1	6 -	5 3	5 1	3 -	5 -	4 -	7 1	4 1	6 1	94 16
B保育園(18)	8 -	9 -	10 -	7 1	3 -	7 -	7 -	6 -	8 -	9 -	7 -	5 -	7 -	7 -	4 -	5 -	4 -	113 1
C保育園(10)	2 -	2 -	- -	2 -	1 -	- -	1 -	- -	2 -	1 -	- -	1 -	1 -	1 -	3 -	1 -	1 -	19 0
D保育園(10)	2 -	2 -	2 -	3 -	3 -	3 -	1 -	3 -	2 -	3 -	2 -	4 -	3 -	3 -	3 -	3 -	5 -	47 0
E保育園(7)	- -	- -	- -	- 1	- -	- -	- -	- -	- -	3 -	- -	1 -	- -	- -	1 -	- 1	2 -	7 2
F保育園(7)	3 -	1 1	1 1	1 2	- -	- -	- -	- 1	2 1	4 -	2 1	1 -	- 1	1 -	2 -	- 1	2 1	20 10
G保育園(6)	2 -	3 -	4 -	4 -	1 -	1 -	4 -	2 -	4 -	3 -	2 -	2 -	2 -	1 -	4 -	3 -	4 -	46 0
H保育園(6)	2 -	3 -	2 -	1 -	1 -	3 -	2 -	2 -	2 -	2 -	3 -	2 -	2 -	1 -	1 -	2 -	1 -	32 0
I保育園(6)	3 -	4 -	- -	1 -	1 -	- -	3 -	- -	- -	3 -	2 -	1 -	- -	1 -	1 -	3 -	4 -	27 0
J保育園(6)	2 -	2 -	3 -	1 -	2 -	1 -	- -	1 -	- -	2 1	2 -	- -	- -	1 -	2 -	1 -	- -	20 1
K保育園(5)	2 -	2 -	2 -	2 1	3 -	2 -	1 -	2 -	2 -	2 -	2 -	3 -	2 -	- 1	- 1	1 -	2 -	30 3
L保育園(4)	1 -	1 -	1 -	- -	- -	- -	- -	1 -	- -	2 -	1 -	- -	1 -	- -	- -	1 -	1 -	10 0

上段：向上・改善 下段：課題・問題点

が、G保育園で7.5項目となっている。一方、E保育園に関しては、延べでも7項目と少なく、全17項目の内、向上・改善したと評価しているのは、わずか4項目である。残りの13項目に関して、7名全員が変化はなかったと評価している。しかし、変化がないということは、以前から十分な保育姿勢で実践に望んでいたと評価していることも考えられる。その詳細は、聞き取り調査により解明していくものとする。

項目で見ると、③「保育士が子どものありのままを温かく受容しようとしている」がB保育園においては、半数以上の10名が向上・改善したと評価している。その内訳は、4.「そう思う」が5.「非常にそう思う」になったとする保育士が7名にも上っている。子どもを受容するとは、「決められた保育スタイルを維持していただくだけでなく、日々そのスタイルを変革し続けて、保育内容を高めていく向上運動をしている実践である」³⁾と捉える。自らの保育姿勢について、そのスタイルにこだわることなく、柔軟

に子どもの姿に対応した実践が求められる。その為の保育士の力量として、子どもの姿を適切に捉えることが要求される。人間は「生まれながらにして好奇心旺盛で、知りたがりや、やりたがりやである」「幼児期は、この能動性を十分に発揮して環境に働きかけ発達に必要な経験を獲得していく時期」であり「周囲の人の温かいまなざしをもって、自己の存在が認められ、支えられているという実感がなければ十分な能動性を発揮することはできない」⁶⁾ということ等を十分に理解していなければ受容することもできないはずである。

(3) 保育のあり方における園別比較

〈領域3. 保育のあり方〉(表4)において、A保育園を除く11園の課題・問題点の項目数は実に少ない。やはりここでもA保育園に関しては、ほとんどの項目で課題・問題点と捉えている保育士がいることに注目したい。先に述べた二領域においても、そのほとんどの項目で課題・問題点と評価している。総人数が多い

表4 〈領域3. 保育のあり方〉における園別比較

領域3. 保育者のあり方

(人)

園名(人数)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	計
A保育園 (20)	4 4	4 3	8 -	4 1	4 1	4 1	4 1	4 1	5 1	5 -	46 13
B保育園 (18)	9 -	7 -	5 -	8 -	7 -	8 -	6 -	6 -	5 -	10 -	71 0
C保育園 (10)	- -	- -	1 -	2 -	2 -	- -	1 1	1 -	- -	2 -	9 1
D保育園 (10)	2 2	3 -	- -	1 -	5 -	4 -	1 -	2 -	3 -	3 -	24 2
E保育園 (7)	1 -	1 -	- -	1 -	- -	1 -	- -	- -	1 -	3 -	8 0
F保育園 (7)	2 2	1 -	1 -	5 -	1 -	2 -	- 1	- -	2 -	2 -	16 3
G保育園 (6)	1 -	1 -	- -	- -	4 -	2 -	1 -	- -	2 -	3 -	14 0
H保育園 (6)	1 -	1 -	1 -	1 -	1 -	1 -	- -	1 -	- 1	1 -	8 1
I保育園 (6)	- 1	1 1	3 -	1 1	- 1	- -	2 -	- -	- 1	1 -	8 5
J保育園 (6)	- -	- -	1 -	- -	- -	- -	- -	1 -	1 -	2 -	5 0
K保育園 (5)	1 -	1 -	2 -	4 -	3 1	2 -	2 -	3 -	1 1	2 -	21 2
L保育園 (4)	- 1	- -	1 -	- -	1 -	- -	- -	- -	1 -	1 -	4 1

上段：向上・改善 下段：課題・問題点

こともあるが、やはり課題・問題点と捉えている部分への改善なくして、質的向上は望めない。であるなら改善の糸口をそこから探っていくことが賢明であると考え。この領域は、全般的に課題・問題と評価している項目が少ない中で、①「形や時間にとらわれない自由な保育をしている」という項目は、最も多くの保育士が課題・問題点として評価している。その背景には、既存の「保育士の自分なりのスタイル」を変革できない意識がある。あえてA保育園の同項目について触れるなら、受審前後で2.「そうは思わない」が3名、4.「そう思う」が2.「そうは思わない」になったと評価する保育士もいる。

しかし、先ほどから述べているように、A保育園に関しては向上・改善したと評価する保育者もすべての項目において4～8名いる。特に③「保育士はうまく活動に入れない子どもに対して遊びのきっかけをつくっている」で8名が向上・改善したと評価している。さらに言えば、B保育園は①「形や時間にとらわれない自由な保育をしている」、④「保育士が必要以上に遊びに介入しないようにしている」、⑥「子どもの活動が継続的に行えるような配慮をして

いる」、⑩「自分の保育を振り返り、反省したり、改善しようとしている」の4項目については、およそ半数が向上・改善したと評価し、第三者評価が与える影響の強さを示している。

(4) 子どもの姿における園別比較

〈領域4. 子どもの姿〉(表5)について各園の傾向を見ていくと、A, B, K保育園については、子どもの姿において、すべての項目で向上・改善したと評価している。上記の3園を除く9園では、向上・改善したと評価する保育士は各項目で少ない。

課題・問題点として評価した点に目を移すと、各園共に、延べ項目数を見ても、いずれも一桁と少ない。やはり〈領域4. 子どもの姿〉の全体的な印象としては、第三者評価がもたらす影響はその他の領域に比べると弱いと考える。第三者評価受審が直接、子どもの姿を変化させるのではなく、これまで見てきた保育士間の関係性や保育姿勢の変化が子どもに与える影響が予想される。森が「保育士の相互関係のあり方が、子どもの園生活における情緒の安定に影響を及ぼす。すなわち、同僚性のあり方が、重要な保育環境の一部分を担っている」と指摘するように、人的環境が子どもの姿に大きく

表5 (領域4. 子どもの姿) における園別比較

領域4. 子どもの姿 (人)

園名(人数)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	計
A保育園(20)	5	3	4	2	6	5	4	1	30
B保育園(18)	—	1	1	—	1	1	—	—	4
C保育園(18)	4	3	7	4	7	6	4	4	39
D保育園(10)	—	—	—	1	—	—	—	—	1
E保育園(10)	—	2	—	—	—	—	1	1	2
F保育園(10)	—	—	3	—	3	—	1	1	8
G保育園(10)	—	—	—	—	—	1	—	—	1
H保育園(7)	—	—	1	—	1	—	—	—	2
I保育園(7)	—	—	—	—	—	—	—	—	0
J保育園(7)	1	—	2	1	2	—	—	—	6
K保育園(7)	1	3	—	1	1	1	—	—	7
L保育園(6)	—	—	—	—	2	—	—	1	3
M保育園(6)	—	1	—	—	—	—	—	—	1
N保育園(6)	—	3	1	—	1	1	—	1	7
O保育園(6)	—	2	—	—	1	—	—	—	3
P保育園(6)	—	—	—	—	—	—	1	2	3
Q保育園(6)	—	—	—	1	—	1	—	1	3
R保育園(6)	—	—	1	—	—	—	—	—	1
S保育園(6)	—	—	—	—	—	—	—	—	0
T保育園(5)	3	2	1	1	2	2	3	3	17
U保育園(5)	—	1	—	1	—	—	—	—	2
V保育園(4)	—	—	—	—	1	1	—	—	2
W保育園(4)	—	1	—	—	—	—	1	—	2

上段：向上・改善 下段：課題・問題点

反映していくと考える。つまり、子どもを取り巻く環境の変化により、子どもの成長・発達は促進されるが、ともすれば、阻害することにも繋がりがかねない。保育士が「環境を問い直したり、子どもと自分の保育行為との関係性を問い直したりすることは研究的な思考プロセスを含む行為」であり、「研究的な思考プロセスをもたなければ、子どもの主体性を尊重する保育は展開できないし、保育士としての成長もありえない」⁸⁾のである。

(5) 親との関係における園別比較

〈領域5. 親との関係〉(表6)において二つの保育園の比較から見ていくと、回答者が同数であるC保育園とD保育園の向上・改善したと評価する項目数に大きな差がある。C保育園では、12項目中、4項目で向上・改善が見られ、延べ項目数は5項目である。それに対してD保育園はほとんどの項目で向上・改善しているが、①「連絡帳で親と子育ての情報を相互に伝え合っている」で7名をはじめ、⑦「親が保育内容等に意見など言える体制ができている」の項目では5名が向上・改善したと評価しており、延べ項目数は30項目となっている。一方では保護者との関係にさほど変化はないが、もう

一方では多くの項目で向上・改善したと評価している。しかし、D保育園の⑪「親自身が保育の中に入る保育参加を行っている」、⑫「クラスの親との懇談会を定期的にもって、学習したり話し合っている」では、一人として向上・改善したとは評価していない。ということは、上記2項目に関する取り組みが、実際に行われているかは定かではないが、少なくとも進展しているとは評価されていない。多くの項目で向上・改善が見られる園においても、部分的には、好転していない項目もある点を見れば、そこに新たな取り組みが必要とされる課題が残されていると言える。

さらに、L保育園に関しては、向上・改善、課題・問題についてどちらも、延べ項目数で1, 2項目と少ない。第三者評価が保護者との関係において、効果を示していないとするならば、受審前の段階で十分に関係が形成されているか、もしくはこの領域に示した項目に関する取り組みの向上は見られないということになる。前者であれば、何ら問題はないと思えるが、仮に後者であるとするならばそこにはやはり大きな課題を抱えていると言わざるを得ない。保育園の園長である嶋は「さまざまな取り

表6 〈領域5. 保育環境・条件〉における園別比較

領域5. 親との関係

(人)

園名(人数)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	計
A保育園(20)	5 2	6 1	6 -	1 -	5 -	3 -	6 2	2 4	4 1	7 1	7 4	1 7	53 22
B保育園(18)	3 1	1 1	8 -	2 -	3 1	3 1	9 -	3 -	- 2	6 1	4 -	1 4	43 11
C保育園(10)	- -	- -	- -	1 -	- -	- -	1 1	1 -	- -	2 -	- -	- -	5 1
D保育園(10)	6 -	3 -	3 -	1 -	3 -	3 -	5 -	1 -	1 -	3 -	1 -	- -	30 0
E保育園(7)	- -	- -	- -	- -	- 1	- -	2 -	- -	- -	3 1	- -	- -	5 2
F保育園(7)	1 -	2 -	4 -	1 -	2 -	1 -	1 -	- -	1 -	1 -	5 -	4 -	23 0
G保育園(6)	- 1	2 -	1 -	2 -	1 -	1 -	2 -	3 -	2 -	4 -	- -	- -	18 1
H保育園(6)	1 -	2 -	1 -	2 1	1 -	1 -	- 1	3 1	1 -	2 -	1 -	1 -	16 3
I保育園(6)	- -	- -	- -	- -	2 -	2 -	1 -	1 1	- -	4 -	1 -	5 -	16 1
J保育園(6)	2 -	2 -	1 -	- -	- -	1 -	1 -	- 1	- 1	1 -	- -	- -	8 2
K保育園(5)	3 -	3 -	2 -	2 -	2 -	3 -	3 -	2 -	3 -	2 -	1 -	5 -	31 0
L保育園(4)	- -	- -	- -	- -	- -	- -	1 -	- -	- 1	- 1	- -	- -	1 2

上段：向上・改善 下段：課題・問題点

表7 〈領域6. 保育環境・条件〉における園別比較

領域6. 保育環境・条件

(人)

園名(人数)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計
A保育園(20)	6 1	8 2	7 2	3 3	3 5	4 1	5 2	6 1	6 -	48 17
B保育園(18)	9 1	6 -	4 -	6 -	4 -	3 -	5 -	4 -	2 -	43 1
C保育園(10)	1 -	1 -	1 -	1 -	1 -	- -	3 -	- -	1 -	9 0
D保育園(10)	6 -	4 -	3 -	5 -	2 -	2 -	4 -	6 -	5 -	37 0
E保育園(7)	2 1	2 -	1 -	2 -	2 -	1 -	4 1	3 -	2 -	19 2
F保育園(7)	1 -	1 -	2 -	1 -	- -	- -	1 -	3 -	1 -	10 0
G保育園(6)	- -	2 -	2 -	2 -	1 -	3 -	3 -	4 -	4 -	21 0
H保育園(6)	2 -	3 1	1 1	- 1	3 -	2 -	1 -	1 -	1 -	14 3
I保育園(6)	1 -	3 -	3 -	1 -	3 1	3 -	- -	1 -	1 -	16 1
J保育園(6)	1 -	1 -	- -	- -	- -	- -	- -	1 -	1 -	4 0
K保育園(5)	3 -	2 1	3 1	3 1	2 -	2 2	2 -	1 1	3 -	21 6
L保育園(4)	- -	- 1	- 1	1 -	- -	1 -	- -	- -	1 -	3 2

上段：向上・改善 下段：課題・問題点

組みを親と保育士の共同の力で行い、そのなかで子どものことを通じて、親も私たちが育つ⁹と保護者の存在の重要性を述べている。主体である子どもの背後にはやはり「第一次養育責任者」としての保護者の存在があり、その

共同の様々な意志疎通や取り組みによって質的向上が実現する。もちろん、保護者への視点が重視され、子どもの存在が蔑ろにされることは決してあってはならない。基本的な視座をしっかりと押さえておくことが必要不可欠である。

(6) 保育環境・条件における園別比較

〈領域6. 保育環境・条件〉(表7)について、課題・問題として捉えている保育士が多いのが、A 保育園とK 保育園である。K 保育園に関しては、向上・改善したと評価している保育士も多く、一人当たりの向上・改善したとする項目数は4項目と12園中一番の項目数である。しかし、課題・問題点と評価した項目数も多い。回答者数が5名と少ないので明確なことは言えない為、その詳細を分析すると、一人の保育士が5項目にわたり、環境面が以前よりも悪くなったと評価している。他2名については以前、2.「そうは思わない」だったが3.「わからない・どちらともいえない」になったと評価している。

回答保育士数が少ない園は、一人の評価が数値として高く出てしまう。しかし、少ない人数においても、それだけ課題・問題点として捉えている保育士がいる以上は、保育士個人もしくは、園全体でその部分について議論の余地があると思われる。

環境と関わることによって、子どもは「主体性を発揮して、自分の遊びを通して自らの発達を押し進めていくためには、自分の考えたことを自分の力で実行し、その結果を子どもなりに見届け、充実感を味わったり、挫折を味わって解消していく経験をする」¹⁰。だからこそ、環境を整備することも、子どもの成長・発達にとって重要な要因となる。

先にも述べたように今回の対象園12園で回答者数に違いがある為、それを一つずつ比較検討することにさほど意味はないかもしれない。しかし、園によって様々な相違点があることは確認できた。

3. 園別分析による類型化

(1) 類型化の目的

調査対象園12園について5段階評定の結果を基に、各園の傾向を探ってきた。これまでの分析により園によって第三者評価がもたらす影響が違ってくるのが明らかになったが、同時に保育士

個人によっても、その捉え方に格差があることも判明した。

そこで、各園、個々人の第三者評価による変化に注目し、分析結果を基に園を類別することにより、その傾向を捉える。また、分類したそれぞれの群ごとに、質問紙の自由記述による保育士の具体的な見解を分析し、それらの園の実態や抱えている課題と突き合わせ、保育の質的向上を現場サイドはどう捉え、どのような実践が行われているのかを検証したが、本報告では紙面の都合上、次回に報告を行う。

(2) 園別分析結果による類型化

5段階評定の結果を基に、第三者評価受審後、向上・改善した項目数と課題・問題点となった項目数により12園の分類を試みる。無論、サンプル数が少ない為、類型化すること自体が目的ではない。むしろ、無理に類型化することにより、事実を歪め、強制的に枠に入れ込むことのないように、各園の実態を一つ一つ詳細に確認し、分析を行う。

向上・改善したと評価する項目数を基に、先ず順位づけをしていく。その為、回答者数の格差を考えて、各園の延べ項目数を人数割し、一人当たりの項目数により割り当てる。

表8は園別に各領域の延べ項目数を記し、括弧内には一人当たりの項目数を示した。合計欄には、延べ項目数の合計とそれを人数割した一人当たりの項目数を明記した。

課題・問題点についても、向上・改善と同様に延べ項目数と一人当たりの平均項目数を表9に記した。園によっては、まったく課題・問題点が捉えられていない領域がある為、その欄は棒線を記した。表8及び表9を基に、数値の高い順に、向上・改善した園の順位づけを行ったものと、課題・問題点となった園の順位をつけたものを表10に示した。

図1は、縦軸に上から向上・改善が多い順とし、横軸を左から課題・問題点が多い順にして、それぞれの順位により、各園の位置関係を記したものである。

図全体を4分割し、右上部の〈向上・改善が多く、課題・問題点が少ない〉園をI群とし、

表8 向上・改善した総項目数と一人当たりの平均項目数

園名 []対象人数	保育者間の 関係	保育者の 保育姿勢	保育のあり方	子どもの姿	親との関係	保育環境・条件	合計
A保育園[20]	56(2.8)	94(4.7)	46(2.3)	30(1.5)	53(2.6)	48(2.4)	327 (16.35)
B保育園[18]	71(3.9)	113(6.2)	71(3.9)	39(2.1)	42(2.3)	29(1.6)	365 (20.28)
C保育園[10]	13(1.3)	19(1.9)	9(0.9)	2(0.2)	5(0.5)	9(0.9)	57 (5.70)
D保育園[10]	27(2.7)	47(4.7)	24(2.4)	8(0.8)	30(3.0)	37(3.9)	173 (17.30)
E保育園[7]	19(2.7)	7(1.0)	8(1.1)	2(0.2)	5(0.7)	19(2.7)	60 (8.57)
F保育園[7]	14(2.0)	20(2.8)	17(2.4)	6(0.8)	23(3.2)	10(1.4)	90 (12.86)
G保育園[6]	33(5.5)	45(7.5)	14(2.3)	3(0.5)	18(3.0)	20(3.3)	133 (22.17)
H保育園[6]	13(2.1)	32(5.3)	8(1.3)	7(1.1)	16(2.6)	14(2.3)	90 (15.00)
I保育園[6]	23(3.8)	27(4.5)	8(1.3)	3(0.5)	16(2.6)	16(2.6)	93 (15.50)
J保育園[6]	7(1.1)	20(3.3)	5(0.8)	1(0.1)	8(1.3)	4(0.6)	45 (7.50)
K保育園[5]	19(3.8)	30(6.0)	21(4.2)	17(3.4)	31(6.2)	20(4.0)	138 (27.60)
L保育園[4]	4(1.0)	10(2.5)	4(1.0)	2(0.5)	1(0.2)	3(0.7)	24 (6.00)

() 平均

表9 課題・問題点となった総項目数と一人当たりの平均項目数

園名 []対象人数	保育者間の 関係	保育者の 保育姿勢	保育のあり方	子どもの姿	親との関係	保育環境・条件	合計
A保育園[20]	26(1.30)	16(0.80)	13(0.65)	4(0.20)	22(1.10)	17(0.85)	98 (4.90)
B保育園[18]	4(0.22)	1(0.05)	-	1(0.05)	11(0.61)	1(0.05)	18 (1.00)
C保育園[10]	-	-	1(0.10)	2(0.20)	1(0.1)	-	4 (0.40)
D保育園[10]	-	-	2(0.20)	1(0.10)	-	-	3 (0.30)
E保育園[7]	6(0.86)	2(0.28)	-	-	2(0.28)	2(0.28)	12 (1.71)
F保育園[7]	7(1.00)	10(1.42)	3(0.43)	7(1.00)	-	-	27 (3.86)
G保育園[6]	-	-	-	1(0.16)	1(0.16)	-	2 (0.33)
H保育園[6]	1(0.16)	-	1(0.16)	3(0.50)	3(0.50)	3(0.50)	11 (2.67)
I保育園[6]	-	-	5(0.83)	3(0.50)	1(0.16)	1(0.16)	10 (1.67)
J保育園[6]	-	1(0.16)	-	-	2(0.33)	-	3 (0.50)
K保育園[5]	3(0.60)	5(0.83)	2(0.40)	2(0.40)	-	6(1.20)	18 (3.60)
L保育園[4]	6(1.50)	-	1(0.25)	2(0.50)	2(0.50)	2(0.50)	13 (3.25)

() 平均

表10 向上・改善及び課題・問題点の順位づけ

向上・改善が多い順		
順	園名	平均項目数
1	K保育園	(27.6)
2	G保育園	(22.1)
3	B保育園	(19.9)
4	D保育園	(17.5)
5	A保育園	(16.3)
6	I保育園	(15.5)
7	H保育園	(15.0)
8	F保育園	(12.8)
9	E保育園	(8.5)
10	J保育園	(7.5)
11	L保育園	(6.0)
12	C保育園	(5.7)

課題・問題点が多い順		
順	園名	平均項目数
1	A保育園	(4.90)
2	F保育園	(3.86)
3	K保育園	(3.60)
4	L保育園	(3.25)
5	H保育園	(2.67)
6	E保育園	(1.71)
7	I保育園	(1.67)
8	B保育園	(1.28)
9	J保育園	(0.50)
10	C保育園	(0.40)
11	G保育園	(0.33)
12	D保育園	(0.30)

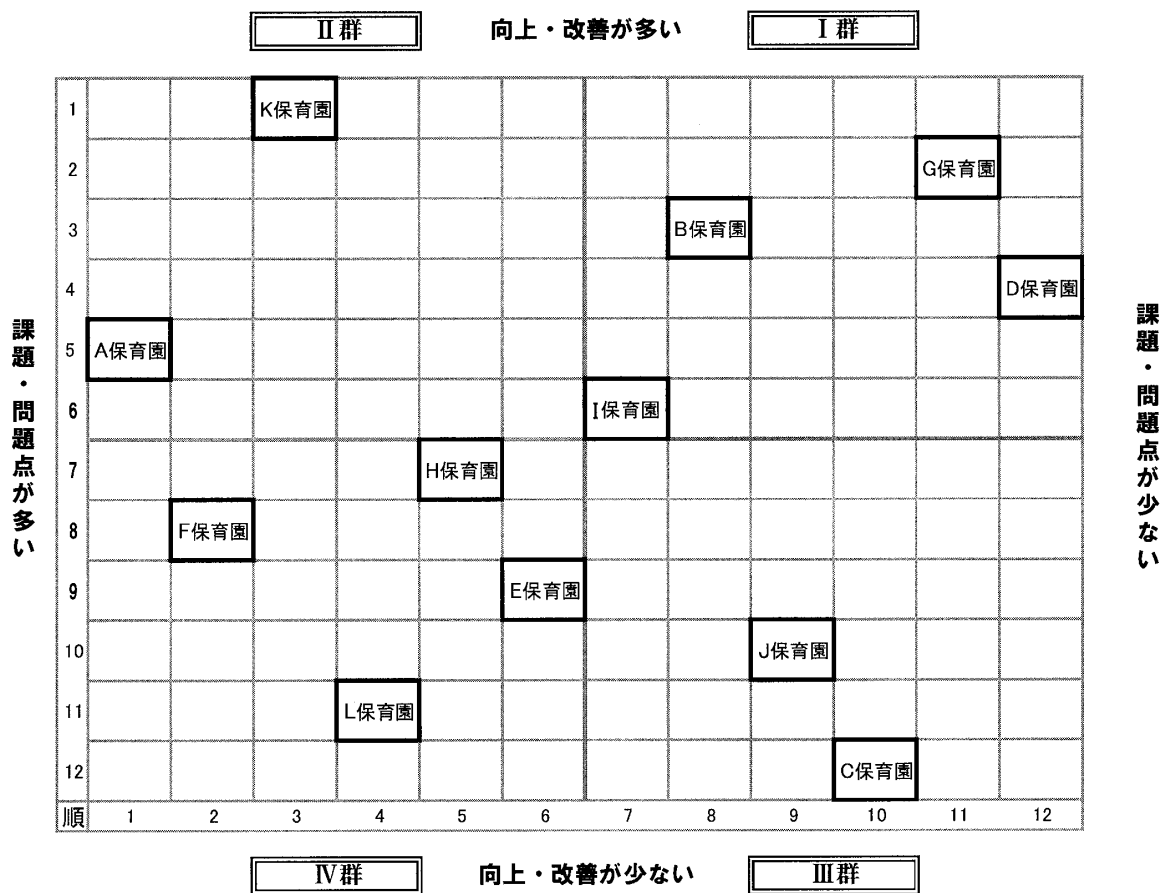


図1 各得点による保育園の類型化

左上部の〈向上・改善が多く、課題・問題点も多い〉園をⅡ群とする。また、右下部の〈向上・改善が少なく、課題・問題点も少ない〉園をⅢ群とし、左下部の〈向上・改善が少なく、課題・問題点が多い〉園をⅣ群とし、4つの群に分類する。

I群には、G保育園、B保育園、D保育園、I保育園の4園が散らばった状態で位置している。Ⅱ群のK保育園、A保育園は離れた位置に2園が属している。Ⅲ群はJ保育園とC保育園の2園が比較的近い位置に属している。Ⅳ群はH保育園とE保育園とは近いが、F保育園とL保育園は離れて位置している4園である。均等に4分割した結果、I群とⅣ群は4園、Ⅱ群、Ⅲ群は2園に分類された。群内の各園の実態が、当然同じだとは考えていない。例えば、I保育園とH保育園は、図のほぼ中心に位置し、どの群に属することも考えられる位置にある。今回は、あくまでも形式的に分類し、第三者評価が及ぼす傾向を確認する為のものである。4群に分類した各園の実態の詳細がその属性に合致しないことは予測している。

本報告に関しては、第三者評価受審によって保育者個人はもとより、各園によってもその影響は様々であることを大まかに解明することができた。次回報告により、これら4群における各園の保育者が、「第三者評価による変化」と「保育の質的向上にとって重要な要因」をどう捉えているのかを、詳記された自由記述の見解に焦点を当て、類型化した園の特徴と照らし合わせる。そこから向上・改善への糸口、ならびに課題・問題点の原因を究明する。また、解明された問題点について、その解決策を模索する。

引用文献

- 1 諏訪きぬ「保育選択の時代と『保育の質』」金田利子・諏訪きぬ・土方弘子編著『「保育の質」の探求—「保育者—子ども関係」を基軸として—』ミネルヴァ書房 2000 22頁
- 2 岡田正章監修『主任保母ハンドブック』チャイルド

- 社 1981 52頁
- 3 同上書 52頁
- 4 同上書 52頁
- 5 浅井春夫「保育者養成と『保育の質』」金田利子・諏訪きぬ・土方弘子編著『「保育の質」の探求—「保育者—子ども関係」を基軸として—』ミネルヴァ書房 2000 74頁
- 6 浅見均「保育者と評価—子どもの成長・変化を測る—」玉井美和子監修・浅見均・田中正浩編著『現代保育者論』学事出版 2004 68頁
- 7 森眞理「現代社会に生きる保育者」小田豊・森眞理編著『保育者論—保育者の探求と創造』光生館 2001 20頁
- 8 河邊貴子「研究者としての保育者」小田豊・森眞理編著『保育者論—保育者の探求と創造』光生館 2001 97頁
- 9 嶋さな江・ひばり保育園『保育における人間関係発達論』ひとなる書房 1998 118頁
- 10 塩美佐枝「カウンセリングマインドと応答性」小田豊・森眞理編著『保育者論—保育者の探求と創造』光生館 2001 83頁

参考文献

- ・ 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・齋藤政子『「3歳未満児用保育の質尺度案1997」による公私立差・地域差・保母の年齢差の検討』『保育学研究』第36巻 第2号 1998
- ・ 岸井慶子「保育現場から保育者の専門性を考える」『発達』21巻 83号 2000
- ・ 鯨岡峻「保育者の専門性とはなにか」『発達』21巻 83号 2000
- ・ 後藤節美「保育者の葛藤と成長」『発達』21巻 83号 2000
- ・ 佐伯胖「学び合う保育者—チーム保育における保育者の成長と学び」『発達』21巻 83号 ミネルヴァ書房 2000
- ・ 佐伯胖『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために—』東京大学出版会 2001